労協連だより

古村伸宏　（日本労協連 ・ 事務局長）

秋の夜長は、もっぱら先々目白押しのイベントの不安にかられ、食や読書や芸術といった「文化」への接触が乏しい今日この頃である。協同労働法集会から協同集会 in 九州・千葉へと続く秋の労協街道は、果たしてどんな文化を後世に残すのだろうか。

協同労働法 9.28 市民大集会は、規模もさることながら、市民会議・労協連に結集している多様な組織に加え、コープさっぽろを退職した人々で結成した「ワーカーズコープ札幌」、仕事おこしシンポで知り合った「NPO・足立区まちづくりサポートセンター」、障害者の自立支援を仕事おこしの活動から強めようとする「障害者自立生活支援センターあゆみ館」など、新しい「協同労働法」を求める人々の発言が、法制定運動をいっそう重厚なものにしていくだろう。また、記念講演の加藤敏春氏は、エコマネーを軸としつつ、その担い手・支え手・主体者たる「人」や、エコマネーを活用しつつ「コミュニティビジネス」とその主体者像が語られるだろう。また、その背景としてのマネー・グローバリズムに対する話も関連させて聞くことで、協同労働及びその法制化の意義が鮮明化されることを期待する。法律づくりの道のりは決して楽ではない。予想し得ないことや自らでは解決し得ない難題もあるだろう。それらも越えて法律を作ることが、「市民が熱望し」作られる水準へと、一直線で駆け上がる実践との関係で重要だと腹を据えたい。

センター事業団の地域福祉事業所の活動と設立の波はいっそう拍車がかかっている。名実共に「地域福祉」の拠点へと育っていく様や、担い手が波状的に広まっていく姿は、法制化のうねりの中心である。また、11月の協同集会の成否やその後を形にしていくのも地域福祉事業所だろう。協同集会の準備は、九州・千葉ともに遅れ気味である。新しい発見への貪欲さやそこから得る実感への猛進が必要な時であり、その突破口づくりが我々の活動のいっそうの広がりを生む好機をつかむだろう。あわせて、両集会はセンター事業団が中心となっての準備であるが、地域の労協が、この集会を通じてどう飛翔するか、も大きなテーマである。そしてその実践の中心もまた、「地域福祉事業所」づくりだと言える。地域福祉事業所「ゆりの木」を立ち上げた船橋が、団地自治会との関係も高めながら活動範囲を広げたり、九州の各地域で自分たちが「仕事おこし」を実感したり、という実感が伴ってこそ、集会準備が現実的な呼びかけになっていくだろう。

この秋のイベントは、単なるイベントではない。労協を社会的制度に高めること、地域福祉事業所や仕事おこしの成果へと結ぶこと、行政との具体的なパートナーシップの新境地を拓くこと、そして、協同労働が地域に根付き芽吹くこと・・・。こうした事実へと連なる「峰」である。「峰」はみんなに見えるところに位置する。知らせる責任は連合会の大事な機能である。そして情報の共有は責

任の共有でもある。「社会への責任」を高めることで、文化への本質的な関わりを深める秋へ・・・。

研究所たより 研究所たより

8/24(土)「欧州に見る若者の自立・就労支援」、9/7(土)「地域通貨 Peanuts に学ぶ」、9/17(火)「企業組合制度整備」と昨年度の反省点でもある研究会の積極的な開催に取り組んでいます。

それぞれの研究会は10～20人の参加ながら、充実した内容であったように思います。忙しい中、報告者やコメンテーターの任を引き受けていただいた方々に感謝申し上げます。内容については所報等で随時報告していく予定です。今後の研究会についてはまだ未定ですが、全ての会員が共通のテーマはない以上、さまざまなジャンルや関心事について取り上げていきたいと考えています。ご希望があればご連絡ください。

ただ一点、誤算は研究会等を充実させればさせるほど、私自身がどんどん忙しくなっていって、次第に首が回らなくなるということです。特にこの夏は協同集会の準備等も重なり、しんどい思いをしています。

9/15(祝)に「協同総研　九州・山口地区会員の集い」が福岡市のセンター事業団九州北事業本部会議室で開催されました。研究会と交流を兼ねて九州各地で開催されてきたこの集会も今年で5回目となります。

今年は初めて菊地が参加させていただきました。連休の真ん中ということもあって、参加者は多くはありませんでしたが、鹿児島大学の神田先生の「地域の自立的発展を考える」という基調提起に続き、自交総連福岡地連の広瀬さんからのワーカーズコープ・タクシーの立ち上げに向けての報告、労協センター事業団地域福祉事業所「海の風」の村尾さんの地域福祉事業の現状についての報告があり、それを受けての討論と、内容豊かなものとなりました。

特に福岡のワーカーズコープ・タクシーの設立には、乗り越えねばならないハードルも多く、その苦労が伝わってきましたが、それ以上に自分たちのことだけを考えるのではなく、他のタクシー労働者のことや地域の経済や暮らし全般まで考えながら仕事おこしに取り組んでいる姿勢に、非常に非常に熱い「思い」を感じました。

突然の小泉首相の北朝鮮訪問により、善しにつけ悪しきにつけ、新しい事態が生まれています。個人的には大分前に「宿命」（高沢皓司著：新潮文庫）を読んで以来、拉致問題については関心を持ってきたのですが、まさかこのような形で国家犯罪が認められることになるとは思いもしませんでした。家族への同情と共に、「平和」であると思い込んでいたこの国も恐ろしい暴力と背中合わせであったことを改めて感じます。9.11のアメリカ人は何を感じたのでしょうか？アフガン、パレスチナ、イラクの人々は何を感じているのでしょうか？

（菊地　謙）